

英米文学テキストにおける南太平洋表象とそのナチュライゼーション

| | |
|-------|---|
| 著者 | 山本 卓 |
| 著者別表示 | Yamamoto Taku |
| 雑誌名 | 平成18(2006)年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書 |
| 巻 | 2005-2006 |
| ページ | 7p. |
| 発行年 | 2007-05 |
| URL | http://doi.org/10.24517/00052844 |

英米文学テキストにおける南太平洋表象と
そのナチュライゼーション

課題番号 17520155

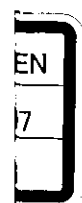
平成 17 年度～平成 18 年度科学研究費補助金
(基盤研究(C)) 研究成果報告書



平成 19 年 5 月

研究代表者 山本 卓

金沢大学教育学部准教授



<はしがき>

本研究は19世紀以降の英米文学作品に描かれた南太平洋像の変遷に焦点を当てたものである。表題にあるナチュライゼーションということばは、(1) クックやブーガンヴィル以降の探検家が収集した知識によってもたらされた、南太平洋の脱神秘化としてのナチュライゼーション、(2) 19世紀中盤から20世紀初頭にかけて、進化論的視点を正当化する言説収集の場となることにともなう、南太平洋の再表象としてのナチュライゼーション(概念の応用・帰化)、(3) 南太平洋のヨーロッパ化において実現する、西洋人にとっての南海のナチュライゼーション(野蛮の文明化)、という三つの視点を意味する。こうした観点からイギリス文学とアメリカ文学の作品の読解を試み、19世紀から20世紀初頭にかけて行われた文学テキストにおける「南太平洋」の概念の変化と、時代思想との整合性を検証した。また、本研究を遂行するにあたって、これまで西洋から一方的に「表象される」対象であった南太平洋地域からの視点として、現代南太平洋作家の文学作品にも研究分野を拡張した。

研究組織

研究代表者： 山本 卓（金沢大学教育学部准教授）

研究分担者： 村上清敏（金沢大学文学部教授）

交付決定額（配分額）

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|------|-----------|
| 平成17年度 | 1,000,000 | 0 | 1,000,000 |
| 平成18年度 | 900,000 | 0 | 900,000 |
| 総計 | 1,900,000 | 0 | 1,900,000 |

研究発表

(1) 学会誌等

山本 卓、「南太平洋のナチュライゼーション：19世紀英米文学における女性表象とその変移」『金沢大学教育学部紀要、人文科学・社会科学編』、56号、2007年、13-25頁)

山本 卓・村上清敏、「『おしりに口づけを』 解題」（訳者あとがき）、『おしりに口づけを』、岩波書店、2006、233-40頁)

(2) 口頭発表（参考）

Taku Yamamoto. 'Kisses in the Nederends and the Japanese Oral Tradition'. Oceania Center Book-Launch Seminar at the University of the South Pacific (Fuji, Sept. 2006)

Kiyotoshi Murakami. 'The Origin of Eroticism in Japanese Literature: The World of Kojiki and Kisses in the Nederends'. Oceania Center Book-Launch Seminar at the University of the South Pacific (Fuji, Sept. 2006)

(3) 出版物（翻訳）

ハウオフア、エペリ..『おしりに口づけを』 村上清敏・山本卓訳（東京：岩波書店、2006）

目次

- 1 研究成果のまとめ
- 2 山本 卓、「南太平洋のナチュラライゼーション：19世紀英米文学における女性表象とその変移」（『金沢大学教育学部紀要、人文科学・社会科学編』、56号、2007年、13-25頁）
- 3 村上清敏、「『タイピー』と「タイピー」のための覚え書き」
- 4 山本 卓・村上清敏、「『おしりに口づけを』 解題」（訳者あとがき）、（『おしりに口づけを』、岩波書店、2006、233-40 頁）
- 5 ハウオフア、エペリ．『おしりに口づけを』 村上清敏・山本卓訳（東京：岩波書店、2006） 抜粋

研究成果のまとめ

本研究は 19 世紀以降の英米文学作品における南太平洋像をナチュライゼーションという概念のもとに読み解く試みである。

18 世紀後半の航海術の進歩により、イギリスをはじめとする西欧諸国はその活動範囲をヨーロッパの裏側にまで拡張する。クックやブーガンヴィルといった南太平洋探検家の航海によって、それまで信じられてきた南方大陸 (Terra Australis Incognita) が存在しないことが実証される。しかしながら、それはヨーロッパに南太平洋に関する新たな発見をもたらした一方で、既存の言説を裏書きする役割を果たした。探検家が持ち帰ったポリネシアやミクロネシアの島々の詳細な記録は、その「正確さ」によって、また観察対象から一定の距離を保持しようという態度によって、かえって読者に解釈の余地を与えるのである。最も単純な例を挙げるならば、航海記の基本的な記録形式である時系列と地域別に区分された配置であろう。イギリス小説の始祖『ロビンソン・クルーソー』において主人公が見せる日付と地形図への執着が、物語のリアリティ構築において重要な仕掛けであったこと、また黎明期の小説形式が伝記や日記と親和性が高かったことを思い出すとき、時間と場所によって整理された南太平洋航海記は、客観性を指向するとともに、虚構に対しても開かれていたテキストであることが分かる。こうした分類方法は自ずとそこに書かれた記録のインデックスとして機能するため、読み手は特定のエピソードを周辺の脈絡とは切り離して読むことが可能になる。すなわち、海によって隔絶された島々の民族や文化が記録される時、そこで示されるのは個別的な点としての情報群であり、それぞれの情報を選択しつなぎ合わせるという物語化の特権は解釈者に委ねられるのである。しかも南太平洋がヨーロッパからもっとも離れた場所に位置することは、観察記録への想像力の介入をより容易にする。19 世紀の英米文学テキストにおいて表象される「南太平洋」は、まさにこうした加工と改変の産物であり、その過程においてヨーロッパ文化との差異化と同質化という二重の作用 (ナチュライゼーション) を被る。

本研究の代表者である山本は、ナチュライゼーションを女性表象の変化の観点から検証した。断片化された南太平洋の知識の中でもとりわけ目を引くのが、性にまつわる言説である。ブーガンヴィルの『太平洋周航記』において詳細に描写される船上の性の饗宴は、性的空間としての南太平洋イメージ形成に大いに寄与する。どこからともなくカヌーがヨーロッパの帆船に近づいてきて、褐色の女性が船員を魅了するばかりか、知らぬ間に甲板に姿を現し均整のとれた裸体を惜しげもなくさらけ出すという記述は、別の日に記載される美しい島の記述と相まって、南太平洋を男性の理想郷として浮かび上がらせる。ここで重要なのは、現地人女性の表象と豊かな自然を結びつける言説が、ギリシア神話や旧約聖書のエデンといったヨーロッパ固有の世界観に基づくことだろう。同様のレトリックはクックの『太平洋探検』にも散見される。すなわち、ブーガンヴィルやクックの成し遂げた

発見とは、南海大陸の伝説を壊す一方で、西洋人（とりわけ男性）が持ち続けてきた楽園というファンタジーを保証するものなのだ。そして、18 世紀も終焉を迎える頃に起こったバウンティ号の反乱は、船員とタヒチ人女性によるイギリス船からの逃亡と南太平洋での理想郷建設という、きわめて「ロマンティック」な幻想を西洋社会に与えることになる。

性的に横溢な場という南海のイメージは、19 世紀の英米文学においても受け継がれ、加工と改変を受ける。なかでもメルヴィルが体験記の体裁をとって書いた『タイピー』は、19 世紀中頃の南太平洋像を考察する上で重要な作品となる。主人公が目撃する船上の饗宴がブーガンヴィルの記録を忠実に再現していることや、現地人女性と白人男性との恋愛からも、テキストが半世紀前の探検記録と影響関係にあることは疑いようがない。しかしながら、『タイピー』の主人公はバウンティ号の船員とは異なり、西洋世界への帰還を果たす。主人公は現地人女性に恋愛感情を抱きつつも、人種の混交というやっかいな領域にまみれてしまうことなく、むしろ白人男性と現地人男性を差異化することによって、自らの白人性を確認するのである。その一方で、恋人を現地人女性の例外として扱い、神話のレトリックを多用することで主人公と恋人の情交を非日常化するのだ。

こうした人種の混交を回避する語りの方法は、19 世紀のイギリス文学作品によっても継承される。たとえば、バランタインの『珊瑚島』は少年向け冒険小説ということもあり、『タイピー』よりも無批判に白人と現地人の差異を提示する。白人少年は無力な現地人の庇護者であり、異人種の恋人たちをキリスト教のもとで結婚させることが、彼らの重要な任務となる。南太平洋という記号にまわりつく性的な要素を物語から抜き去ることによって、白人と非白人のカテゴリーを明確にし、主従関係を設定しようという試みは、大英帝国拡大期の植民地主義イデオロギーを直接的に反映する。しかしながら 19 世紀末に至ると、もはや『タイピー』が描いた西洋文明から切り離された未開の部族は消失し、南太平洋を舞台にした作品は白人と異人種との混交を扱わざるをえなくなる。また、ブーガンヴィルやメルヴィルが用いた神話のモードで現地人女性を記述する方法も、南太平洋の情報が蓄積された時代には非現実すぎて、物語に導入することは困難になる。スティーヴンソンの「ファレサアの浜」はこうした状況の中で、時代に呼応した境界線の構築を模索する。その際に物語が援用するのは、文化人類学や心理学といった 19 世紀末に勃興した新しい学問による世界観である。ダーウィンとの影響関係が指摘されるフロイトの文化人類学的考察に着目するとき、異人種や異文化を「客観的に」扱いつつも、根底に西洋中心主義を孕むがゆえに、その客観性が偏向したものであることに気づく。スティーヴンソンが「リアルな南海小説」と述べた中編小説の中核を形成するのは、このような色づけされた客観性であり、西洋人と現地女性の直接的な交歓を扱いつつも、前時代の物語よりも巧妙に白人と現地人とを分断するのである。

本研究期間には網羅することができなかったが、20 世紀に入っても南太平洋の女性と白人男性の関係は、引き続きイギリス文学テキストの主要なトピックとして留まり続ける。ただし、19 世紀末からの第一次世界大戦までの期間に、南太平洋は急速に開発されたため、

そこを訪れた作家が見たものは前世紀の南太平洋とは大幅に異なる。たとえば、モームによる一連の南海ものは西洋化された南太平洋をその背景に抱える点で、西洋人にとって日常化された南海であり、今日のリゾート化された南の楽園のイメージに近い。また、南海探訪記の作家として、ベアトリス・グリムショーといった女性ジャーナリストの出現も注目すべきだろう。女性一人でも南太平洋に渡航することが可能になった時代に、存在しない食人種を希求する彼女の態度は、クックの時代からの南太平洋イデオロギーの強固さを物語るし、20世紀に開花する映像作品における南太平洋像の構築に通底するものと思われる。

研究分担者である村上は、ナチュライゼーションをネーチャーライティングの作品に当てはめ、エコクリティシズムの観点から分析した。ネイチャーライティングの定義は狭義では、「自然および自然と人間の関係を扱ったエッセイ」であるが、広義の環境文学となると、ジャンルを問わず上記の視点を持ったすべての作品が含まれる。したがって、近年ではメルヴィルの『白鯨』やヘミングウェイの『老人と海』、ひいては一見すると対極にあると思われるピンチョンの『重力の虹』までもが批評の対象となっている。

また、エコクリティシズムとは、これまでの文学批評の視点が人間社会およびその構成員たる個々人にまつわるさまざまなレベルでの軋轢、葛藤あるいは和解に焦点を合わせてきたのに対して、その枠を広げて、人間以外の自然や動植物も含めた諸々の存在およびそうした存在と人間との関わりそのものに焦点を合わせようとするものである。

こうした視点から、メルヴィルとジャック・ロンドンによる二つのタイプに着目した（詳しくは、本報告書に収録されている研究ノートを参照のこと）。メルヴィルに関して言うなら、村上著「ロバート・フィンチの鯨学」（『アメリカ文学の〈自然〉を読む』ミネルヴァ書房所収）をはじめとして、『白鯨』の持つネイチャーライティングとしての特質の指摘がなされはじめているところである。また、これからは『タイピー』、『オムー』、『マーディー』等の『白鯨』以前の諸作品におけるメルヴィルの、とりわけ現地人を見る眼差しとその変容、文明と野蛮の定義とその逆転、西欧人を告発するという姿勢から人間存在のありようそのものを問題にしようとする姿勢への変化についての分析も進むことが予想される。

ロンドンについては、アラスカの自然と動物の野生を扱った諸作品（1903年出版の『野生の呼び声』など）がまず頭に浮かぶが、こうした作品はまた同時に、同じ1903年にジョン・バローズが言い出した「自然の模倣論争」の格好の標的となり、ロンドンの描く野生の動物の姿は、実態からはほど遠く、擬人化の悪影響が露骨な形で出ているとされた。そうしたこともあって、一般読者の人気とは裏腹に、これまでロンドンの作品は意外にもエコクリティシズムの批評対象から外されてきた印象がある。いわんや、南海を舞台にした作品群はほとんど忘れ去られたかの感があり、「タイピー」に限定して言うなら、白人がもたらした疫病に苦しむ原住民の姿を描いた暗い作品として片づけられてきた。しかし、ロ

ンドンの自然淘汰論、進化論が比較的色彩濃くにじみ出ている本作品をエコクリティシズムの視点から検討すると、自然淘汰論なるものの限界が露呈されると同時に、ロンドンの文学世界を貫いている思想は想像以上に骨太で、腰が据わった冷徹なものでもあったことが分かり、上述したアラスカものと呼ばれている諸作品をも逆照射し、そうした作品群の再評価へとつながる可能性さえ残されているように思われる。

最後に本研究による成果の一部として、南太平洋作家による長編小説 *Kisses in the Nederends* の翻訳（邦題『おしりに口づけを』、岩波書店）を挙げる。これは村上、山本の共同作業の結果であり、日本で初めての南太平洋の長編小説の翻訳となる。我々がこの作品に注目したのは、小説の奇想天外さはもとより、現代の南太平洋からの視点が、本研究課題のアプローチに有用であったためである。本研究は西洋が南太平洋をどう表象するかという点を扱ってきたが、そういった西洋からの一方的な記述に対抗するすべを南太平洋の人々は 20 世紀中葉に至るまで持つことはできなかった。植民地体制が瓦解し、南太平洋の島々が独立してようやく、南太平洋の作家による文学作品が出現するのである。その第一世代ともいえるエペリ・ハウオフアの作品は、アルバート・ウエントが描く植民地主義の傷跡とは異なり、諧謔的に西洋と南太平洋の関係をあぶり出す。グロテスクとスカトロジーによって彩られる『おしりに口づけを』は、その中核に西洋世界、同時に西洋化された南太平洋に対する批判的な視点を据え、新たなオセアニア地域のアイデンティティを構築しようとする。19 世紀の英米文学によって継承され、加工と改変を加えられた南太平洋像が、21 世紀を迎えた現在でさえ、ツーリズムや映画において楽園や純朴な島嶼民族という虚像を供給し続けている状況を考えると、20 世紀後半の現地人作家の文学テキストはナチュラライゼーションに対するアンチテーゼとしてきわめて重要な意味を持つ。本報告書の最後につけた翻訳からの抜粋は、とりわけ西洋対非西洋の構図が明確な部分である。

（研究代表者、山本 卓）